

発達に不安を抱えている親子の子育て支援 その2

—保護者と成長を喜び合うために—

佐々木孝子

（宮城教育大学教育学部幼児教育講座）

KEY WORDS: 発達・幼児期・保護者の気持ち

（目的）

子どもの発達に不安を抱えている保護者は幼稚園入園を目前に控えた3歳ごろにことばの発達や対人関係の育ち、身辺処理などの心配事を抱えて不安感が募り、焦りを抱いてしまう。ことばを話したり同年齢の友だちと対人関係を育てたりするためには、まず自分のことが自分でできるようになることが大切なので、昨年度は身辺自立を目指した排泄の取り組みを通して子どもが発達していく様子を保護者と共有し、身の回りの小さな課題に取り組むことの大切さについて考察した。今回は活動を通して見つけた子どもの苦手なことなど、子どもの実態をうけとめながらどう取り組んだらいいかについて保護者と考えながら、幼児期の発達にとって大切にしたいことは何かに気付いていく過程と、保護者の気持ちとその変化について考察したい。

（実施方法）

- ・実施主体は M 県 M 町で健康福祉課が早期療育指導訓練事業として月に2回2時間程度、親子8組を対象に H26より実施。スタッフは保健師・公認心理師・保育士で筆者は遊びの提供と保護者支援に携わる。
- ・町独自のファイルを作成し、これまでの成育歴や現在の生活の様子を記入することとする。保護者は支援教室の感想や心配事、家庭での様子を記録し成長の記録が必要に応じて、これからの支援や相談機関にも引き継がれるように積み上げていく。保護者の感想には筆者が毎回コメントを返し、情報共有しながら子育てを援助することをめざす。

（1）子育てにおける保護者の不安

- ・支援センターなどでは一人遊びが主体で、友だちと仲よく遊ぶことができずにおもちゃを取り返すなど乱暴な関わりが多い。
- ・何かに夢中になっているときは声がけにも応じない。
- ・自分の興味のあること以外では関わりがとりにくく視線も合わない。
- ・自分の思うようにならないと、物にあたる、頭を打ち付けるなどの自傷行為もみられることがある。
- ・日常生活で、言われていることはわかるが自分からことばで気持ちを伝えることができない。
- ・発語が少なく発音も不明瞭で何と言っているか伝わらないので、友だちとコミュニケーションが取れるか不安である。
- ・トイレトレーニングしたいが拒否感が強く思うように進まないで諦めてしまう。おむつがはずせない。
- ・食事の好き嫌が多く、主食以外のおやつを好み、食事のマナーも身につかず、手づかみなので介助してしまう。
- ・集団参加が苦手なのでみんなと一緒に着席してられるかどうか、クラスから抜け出してしまうのではないかなど、幼稚園生活が心配で仕方ない。

（2）支援事業の主な取り組み

- ・体操やお返事、うた遊びは簡易なものを選択し繰り返す。
- ・生活習慣の自立に向けた取り組み（排泄・食事・睡眠・着脱等々）の重要性を伝えていく。
- ・子どもからの自発的な表現や、問題だと思われる行動の裏にある子どもの気持ちや理由を探ることで子どものこころに気付いてもらう。
- ・子ども同士のかかわりが育つように配慮するとともに、保護者同士の関係も育てながら、支え合いをエンパワーする支援に努める。
- ・定期的に心理師が検査を行い保護者と共に発達を確認する。
- ・町のファイルに記入してもらい保護者の心配事や課題などを整理すると共に成長の思い出の写真（家族も）を貼ってもらう。

（取り組みの結果）

- ・活動内容を繰り返すことで子ども自身が見通しをたてやすく、回を重ねる中で徐々に子どもが自分から参加できるようになっていく場面を保護者が捉えられるようになっていった。
- ・トイレトレーニングは家庭ではなかなか進まないが、着脱を取りこみ、おまるを活用しながら段階的な方法を示すことで定時排泄や自立に向かう成功例がみられるようになった。
- ・子どものささやかな動きと変化を発見するために具体的な場面で、見どころや視点を伝えることで、保護者が子どもの姿を丁寧に見られるようになっていった。
- ・ペアレントプログラムを応用した保護者同士の支え合いを目指し保護者が心の底にある気持ちを語り合うことで、悩みや不安は自分だけではなく他の保護者も同じであることに気付き肩の力が抜け、気持ちが前向きになっていった。
- ・町のファイルに記入することで現在の問題点を整理するだけでなくこれまでの成育歴を振り返り、子どもの成長は家族の歴史であることを改めて意識できるようになっていった。

（考察）

発達に不安を抱える親子にとって、幼稚園入園前の集団参加への不安と戸惑いは計り知れないと予想されるが、どのような手立てがあり、家庭の日常生活でどう取り組んで準備していったらよいかの具体的方法を知る術がないといっても過言ではない。その不安に取り組んだ保護者支援が町の単独事業として実施していることは意味が大きい。保護者のありのままの気持ちを受け入れるスタッフが丁寧に保護者を支えていくことがその後の成長に希望を感じ豊かな子育てを支えることにつながっていくものと思われる。現在課題を抱える家族が誕生から現在までの家族の喜びの歴史を振り返る機会の提供もこれからの歩みにとってはかけがえがないことである。

尚、本稿は実施主体の許可を得て発表するものである。

（TAKAKO, Sasaki）